

臨床倫理学入門コース実施報告（佐藤恵子）

「京都大学を拠点とする領域横断型の生命倫理の研究・教育体制の構築」プロジェクトでは、京都大学大学院文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター（CAPE）ならびに京都大学附属病院臨床研究総合センターの協力のもと、臨床倫理学に関する教育プログラム（臨床倫理学入門コース）を2017年8月10・11日に京都大学大学院法学研究科の会議室にて開催しました。

今年で3回目となる本コースの目的は、臨床上で難しい問題に遭遇した際に、「患者の利益となる方策を考え、方策を実現する戦術や技術を立て、実践する」ために必要な知識やスキルを身につけることです。臨床倫理の問題解決を支援する部署を有する施設はまだ数少ないですが、臨床で日々起きている問題は、その場にいる医療者が気づき、適切な方策を考えて行動できれば、それに越したことはありませんので、まずはマネジメントの技能を身につけた人を増やすこと、そして、その人達を中心となって院内で臨床倫理コンサルテーションを担当したり、支援部門を運営したりすることのお手伝いができればと思っています。

教育プログラムは、倫理学や法学の基礎知識、臨床倫理コンサルテーションの考え方や運営の実際、インフォームドコンセントやACPの理論と実践、治療の無益性とは何かに関する講義ならびに、2つの事例についてグループディスカッションにて検討することで構成しました。患者の問題解決には、まず患者の利益となる方策を理論的に考え、患者・家族や医療者の気持ちを感じ取り、方策を実践するための戦術を立てることが必要ですので、これらの過程を経験できる内容にしました。1日目の事例は、進行期のがん患者に家族がエビデンス希薄な治療を申し出たときどう対応するか、2日目の事例は、終末期の患者の生命維持治療をどうするか、というかなり難しい内容を取り上げ、受講者にはグループに分かれて、臨床倫理コンサルテーションチームとして検討してもらいました。

受講者は関西圏に限らず、日本各地から42名（医療者・社会人が38人と哲学・倫理学・法学等の学生が4人）、学生から地域や大学で指導的立場にいる方々まで、多彩なメンバーが集まりました。講師も、児玉聡（文学研究科）、服部高宏（京都大学国際高等教育院）、竹之内沙弥香（医学研究科）、長尾式子（北里大学保健学研究科）、松村由美・佐藤恵子（医学部附属病院）、門岡康弘（熊本大学）、ファシリテーターには大庭弘継・立場貴文（文学研究科）、深川良美（医学部附属病院）、鈴木美香（iPS細胞研究所）と複数領域から参集いただき、文理融合の学際的な講義を提供することができました。

グループディスカッションや全体の討議、懇親会でのおしゃべりも大変活発に行われ、これも受講生とスタッフのみなさんの熱心さと、お人柄のよさ（たぶん）によるものと感じております。受講者の方々からは、基本的な考え方を知ることができてよかった、違う立場の人からさまざまな意見を聞いたり意見交換することができてよかったなど、総じてよい評価をいただき、オーガナイザーとしても、やり甲斐を感じることができた2日間でした。同時に、医療者の方々からは、倫理問題を解決する取り組みに対する切なるニーズをお聞きし、病院で臨床倫理コンサルテーションの組織を運営したり、勉強会を開催する際にどうしたらよいか、訪問看護ステーションなどで委員会組織もない場合に問題にどう対応すればよいかなど、今後の課題として考えたいと思いました。そして、本セミナーでは、現場の数人が集まり、基本的な知識と、何をどう考えて解決

の道筋をつければよいかを共有できれば、問題を俎上にあげて対話できることを感じていただけたと思いますので、受講生のみなさんが核となって活動を始めること、それと同時に、私たちは、そのような活動を継続して支援できる体制を作ることができればよいなど妄想を広げているところです。

また、臨床倫理の問題をどう解決したらよいか、どのような支援組織があればよいか、臨床倫理コンサルタントは医療者や患者とどのような関係を構築するのがよいか、などについては、私たち自身も試行錯誤している部分であり、セミナーを通じて学んだり、実践を重ねたりすることで、模索を続け、新たなモデルや取り組みを提案したいと思っています。

2 日間にたくさんの内容を詰め込み過ぎている感じはありましたが、充実したセミナーになったのは、外気温に負けないくらいの熱さでご参加くださった受講生のみなさん、事前の企画・準備から当日の運営までお世話くださったスタッフのみなさんのおかげです。心より御礼申し上げます。

佐藤 恵子